4面から続く

午後6時になれば

近藤さんが「だんだんワンコインこども食堂」の前で。取材中も、地域の住民が訪れていた

ここ十数年で、給付金や食料配布など、子どもの貧困に取り組むさまざまな政策ができました。だけど、それでも子どもの貧困はなくならない。なぜか――。事の本質は、人間関係の希薄さにあると私は思います。

近隣同士、手を差し伸べ合えば、苦しむ子どもの数も減っていくはずです。こども食堂がなくても、子どもたちが元気に育つ社会になってほしいんです。

――〝大人の心の貧困〟が子どもの貧困を生み出しているともいえますね。

―日本の子どもの「9人に1人」が相対的貧困の状態にあるといわれています。

「こども食堂」は単なる貧困対策ではありません。〝地域活性化の場〟だからこそ、ここまで全国に広まってきたのでしょう。

一方で、本質的な問題から目をそらしてはいけません。私は、こども食堂を増やすことよりも、町全体が〝人に優しい社会〟に変わっていくことの方が大事だと思っています。

例えば、午後6時になったら、みんなが家の前にのれんを出す。〝お母さんがいないんだったら、ご飯食べていっていいよ〟〝お風呂にも入っていいよ〟――そういうふうに、互いを助け合う、思いやりあふれる社会になってほしい。

「おいしいね！」――ご飯を頬張る子どもたち（近藤さん提供）

子どもたちからの感謝の手紙（同）

食堂前の道路でお絵かき。イベント名は「こども天国」（同）

近隣同士が互いに助け合う――〝優しい社会〟で子どもは育つ

――こども食堂の活動拠点では、「だんだん寺子屋」や「学校に行きたくない時カフェ」「産前産後保健室」など、さまざまなイベントが行われていますね。

ひきこもりや不登校など、八百屋に来たお客さんから個人的な相談を受けることがあるのですが、〝こんなことをしたらどうか〟〝あんなことができるんじゃないか〟と動いているうちに、活動の幅が広がっていきました。

「だんだん寺子屋」は、子どもの学習を支援する場所です。勉強が嫌いな子、障がいのある子など、さまざまな子どもたちがやって来ます。ボランティアの人が子どもたちの勉強を見ています。

また「学校に行きたくない時カフェ」は、子どもが登校したくない時の居場所がつくれたらと思い、始めました。子どもが来た時は、学校にも連絡した上で、見守っています。

「産前産後保健室」では、産後うつや子育て中のお母さんなどが、ほっと一息つけるよう、一緒におきゅうをしています。

その他にも、多くのイベントを催しています。

――最後に、地域のために何かしたいと思いながらも、一歩を踏み出すのはハードルが高いと感じている人へ、メッセージをお願いします。

〝誰かがやっているから、同じようにやってみよう〟ではなく、〝自分には何ができるか〟を考えて、一歩を踏み出すことが大事だと私は思います。その一歩は、あいさつや声かけなど、ほんの小さなことでいいんです。

私も普段、八百屋の前を通る人に向かって「おはようございます」「こんにちは」と声をかけています。初めは、返してくれる人はほとんどいませんが、一度あいさつすると、次回は小さな声でも返してくれるようになります。こういうところから優しい雰囲気が生まれ、互いを助け合う社会に変わっていくのではないでしょうか。

何か大きなことをする必要はありません。ハードルを下げるのは自分自身です。一つできたら、次、何ができるかを考え、行動に移す。その積み重ねが大事だと思います。

人間性を養う教育

子どもと関わり始めて十数年、これまで多くの課題を目にし、さまざまな人と語り合ってきました。そうした中で、私が行き着いた結論は、全ての課題解決の鍵を握るのは教育だということです。

教科書的な教育ももちろん大事ですが、それ以上に人間性を養う教育が大事だと思います。自分の思いをしっかりと伝えられる力、意見の異なる人とも、とことん話せる力など、子どもたちの人間力を育む教育が、現代社会にはあまりにも少ない。受験や就職など、社会の競争に勝つための教育が多いように感じます。

そうした問題意識もあり、私は現在、こども食堂の活動場所で「教育居酒屋」というイベントを開催しています。学校の先生や教育に関心のある人たちとお酒を飲みながら、教育についてざっくばらんに話す場です。

心を変えるのは、対話しかありません。私なりに、教育の分野で何かお手伝いができたらと思い、活動しています。

こども食堂では、読み聞かせなど他団体によるイベントも開催［同］

ご感想をお寄せください
sdgs@seikyo-np.jp
右＝聖教電子版の「ＳＤＧｓ」特集ページが閲覧できます。
左＝海外識者の記事の英語版を読むことができます。